鳥・どり・緑

大嶋通弘

日本横断という広範囲の移動を行なう合宿に参加して、川沿いの動物群の調査をしてみようか、と考えて大阪を出発したが、同一場所にいる時間が短く、その上未熟なために数種の鳥の識別を行なうのが精一杯となってしまった。識別は、鳴き声、大きさ、色、形等その他の特色をガイドと照らし合わせて行なったが自分ながらかなり困難な作業に思った。

さて、我々が富士川河口へ向う途中、ノウサギの糞を多数発見し、附近を歩きまわるとかなりの数の糞があちこちに見られた。たぶん集団で草むらの中に住みついているのだろうが確認はできず。
同所でアジサシを見かける。この鳥は、餌を見つけたのか、時々川の中へ急降下をくり返していた。
河口では恐怖を感じる程のカモメの群れに出迎えられた。
この一日はかなりゆっくり観察をしたが、以後は確認のみに終わって残念である。

翌日、北小松から偵察の間、岩蔭に十数羽のキセキレイと飛翔中のハクセキレイ一羽、河原のハシボソガラスの群れ、岩の上のホオジロ一羽を見る。街中にはツバメが3羽夕空を飛んで行った。坂下に入るとかなりの数のツバメが街に住んでいた。河原には主にハシボソガラスが群れを成している他野バト、ウグイスが雑木林で鳴いている。甲斐大島ではホオジロ一羽を河岸で確認、雨上りのテントサイトではキセキレイ、ツバメ、スズメ等を見た。波高島では、カラスの群れの上をトビがまっていた。また、キセキレイが川の上を直進していった。楠甫、カラス４０羽、ウグイス、ツバメ、セグロセキレイ夫婦に会う。
市川大門を過ぎた頃から少し様子が変わり、ツバメ、カラスの他にシラサギ（区別不可）アオサギの群れに会う。アオサギには、ファルトのすぐそばの木立ちから突然４０羽程づつ飛び出すので驚かされる。中道橋から山梨の松林では、早朝にオナガが海の波のように何羽も飛んでおり、眠りを妨げられた。ギィイーと鳴く声はあまり快い気分を与えるものではなかったようだ。
山梨市を過ぎると、もう山の中へ入ってしまい、鳥の種類もウグイスのような山の鳥が増えていた。沢に入ると、鳴き声は聞こえるが、姿を見せない。メジロが我々に驚いて、目の前を飛び去った以外は、ウグイスの声、ヤマガラ、アカショウビンだと思われる声を聞くのみに終わった。
甲武信岳を登り、山麓へ向う間の森林ではルリビタキ・ミソサザイ・ウグイス等の鳥が騒がしいほどにさえづっていた。梓山を通り居倉を川下りの出発点として、やっと日本海を目指す我々の頭上を、橋の下に巣を作っていた三十五羽のツバメが飛び交っていた。
下り始めると、川岸をセグロセキレイやキセキレイ、カケスを発見、海尻ではウグイス、ハクセキレイ、キセキレイ、勝間、小諸、戸倉と、全く変化が見られず、殆んど見つけることもできなかった。附近は町が続いていたためであろうか。景色も川の様子も立ケ花から変わり始め、同時に鳥もカラス・トビ・キセキレイ・セグロセキレイ・スズメ・アオバト・カモ類・シラサギ・ケリ・アオサギと数も種類も変わり出した。西大滝への途中、オオジシギが川岸の草むらにうずくまっているのを発見。セグロセキレイ・トビ・カラスにも出会う。押付にはキ・セグロセキレイ・城之古はキ・セグロセキレイ・シラサギ・カラスを見つけた。川井、長岡はもう町。キセキレイ・シラサギ・トビに加えてユリカモメらしい鳥に出会った。大川津の閘門を通過して最初いたシラサギ、アオサギ、トビに変わって、いつの間にかカモメにしか会えなくなっていた。新潟のカモメは我々を信濃川河口まで送ってくれた。

今回は鳥の名前の羅列に終わったかもしれないが、太平洋から日本海の間を地形と鳥の分布から山頂を中心に八つの地域をもつことができるのではないかと思う。河口、平地、内陸、森林山地、とでも分ければよいだろうか、距離の長短はあるが、鳥の生活状態はほぼ同じような地形を持っていて、住む鳥も太平洋側と日本海側で対象を成しているように思う。終始線的な観察しかできなかったが、以後の課題として、新しい経験ができたと思っている。

残　念　記

野村秀明

今回の、延々３１日間にもおよぶ日本列島横断航行合宿において、私一人だけが、みなと全行程の苦楽を共にすることが出来なかったのである。

忘れもしない7月３１日……合宿がはじまって１０日目、あの発狂しそうな、川を遡るという行程が終わり、これから、メインイベントである甲武信ケ岳に挑戦するという日の夜だった。

あの狂気の１０日間を無事に終えたのだという安堵感と、まだ全行程の半分も来ていないのかという絶望感とでも言うか、そんな複雑な気持ちで、明日からの甲武信ケ岳越えの準備をしていた。

厚い雲が月をすっぽりと覆い隠し、真暗で、霧雨の降る夜9時ごろだった。

そんなロマンチックな？　夜に事もあろうに、鋭く天を仰ぐコンビーフのカンの上を素足で歩いてしまったのである。

テント内では3人が寝ころんでおり、私は外で仕事をしていた。その時テント内より、灰ざらにするから空カンを取ってくれという声があり、私は何の気なしに、コンビーフの空カンを手渡してやったのである。

仕事も終わり、テントへもどり、みなと楽しい一時を過ごそうと入りかけると、もはや寝る用意をしており、3人が寄って寝ころんでいたため、私は反対側から入ったのである。

そして履物だけを、入口の方へもどしておこうと、足を3歩前へ運んだ途端、足に激痛を覚え思わずその場に倒れこんでしまったのである。かなり激しい倒れ方だったらしく、テントが傾き、ちょうど下にいた吉野君の顔面にも危害を及ぼしたらしい。

直感的に空カンをふんだなということはわかったが、他の3人には何事やらさっぱりわからず、吉野君によれば「どついてやろうか。」と一瞬思ったそうである。